

臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報
平成24年(2012)新春号



創立 100 周年を迎えた母校正門

平成 20 年 3 月 19 日、国の登録有形文化財となる。村松高校は、明治 44（1911）年に新潟県立村松中学校として創立された。正門は更に遡り、明治 36（1903）年に新潟県立工業学校の正門として建造。中央の門柱一対（間口 4.5m、高さ 4m）はイギリス積みで、通用門側の脇柱（高さ 3.2m）はフランス積み。いずれの門柱も煉瓦造で、柱頭をコーニスで飾る。

100 周年は通過点

東京同窓会会長 鈴木 多喜男（高4回）

会員の皆様、謹んで新年のお祝いを申し上げます。

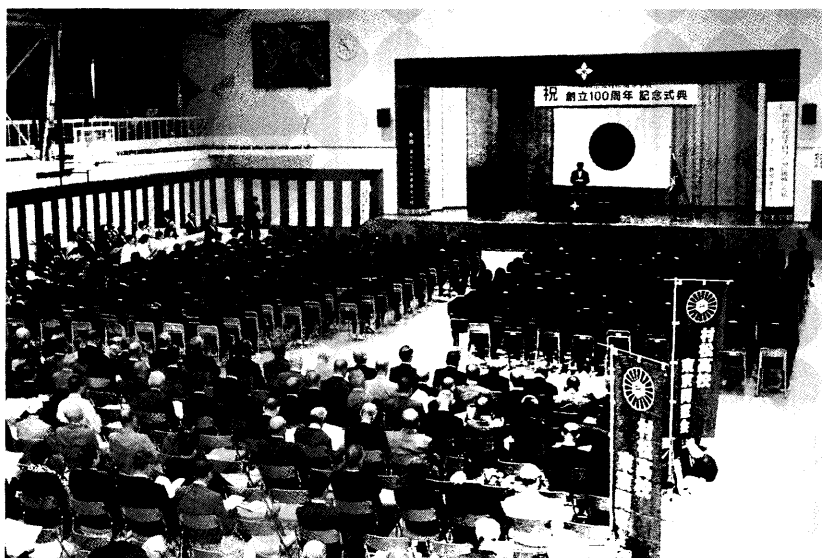
昨年の3月11日に発生した大震災後、復興状態が順調とは言えず心を痛めて居りますが、政府行政の迅速なる施策を祈るばかりです。さて、当会の運営も収支の悪化を防ぐために、会員名簿の実を上げるよう整理、経費削減に着手した結果、530名の登録から190名の休眠会員を外し340名の名簿で運営することにしました。今後とも、新会員の方々には積極的なご参加をお願い致しますと共に、新たな同窓生をご紹介いただけましたら幸いです。

明治44年設立の母校100周年記念行事が平成23年10月1日に開催され、東京同窓会からバス利用その他で大勢の会員が参加いたしました。その折、実行委員や生徒の皆さんには色々とお世話になり、御礼と共に深く感謝

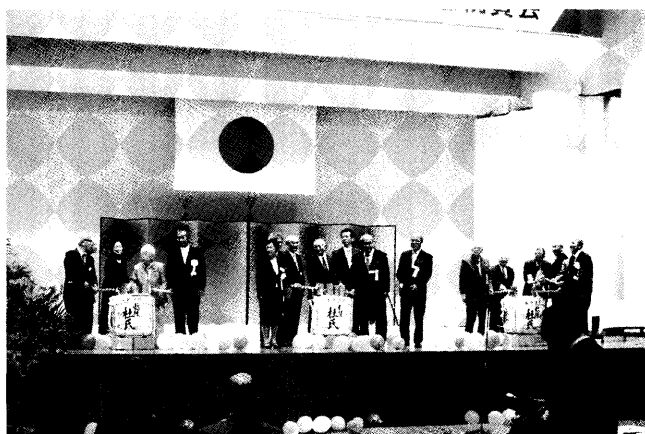
申し上げます。久しぶりに訪れた所為か、学校全体が活気に満ちているように感じ、生徒達も活発で親切に対応してくれ、意外とみんな確りしているな〜と、思わず心が明るくなりました。

しかしながら、近年の社会情勢は自然災害や世界経済の疲弊で混乱の度合いが増しています。その上人心の乱れはその極に達し、並大抵のことではこの荒海に船出することは難しく、余程の能力を蓄えて行かなければなりません。従って、在校時の本分「塵の基を遠ざけた母校」に於いて「丘に臥す龍」の如くじっと耐えながら学業に勤しみ、豊かな心情を育て、戴きたいと願っております。また、母校が次の100年に向かって輝かしい歴史を刻みつつ発展することを心から信じて居ります。

新年にあたり、皆様のご健勝を祈念申し上げます。



100周年記念行事に参列した東京同窓会の面々



祝賀会で鏡割り

さくらんど会館にて



「誇りを胸に」記念碑の除幕式

ご 挨拶

村松高等学校 校長

新年あけましておめでとうございます。同窓会員の皆様におかれましては、お元気に新しい年をお迎えのことと存じます。日頃より村松高校の教育活動に多大なご理解とご支援を賜り、心より厚くお礼を申し上げます。おかげさまで昨年は、創立100周年記念式典を厳粛なる雰囲気の中に、立派にやり遂げることができました。諸先輩方の並々ならぬご協力に心より感謝申し上げます。

大先輩である小池生夫先生のご講演では、生徒、職員、保護者、同窓生、会場のすべての聴衆が先生の誠実な心のこもったお話しに、つつい引き込まれてしまい、予定を30分以上も超過してしまいました。小池先生には心より感謝申し上げます。松高の生徒達も、立派な大先輩のご講演に心を揺さぶられたようです。また、創立100周年記念式典での同窓生の方々があまりにたくさん集まっていたことにびっくりしたようで、あちこちで生徒から『松高って、すげーんだ』という言葉に耳にいたしました。

今回の100周年記念式典で、現松高生が大変気持ちよく仕事をしてくれました。ある野球部の巨漢の生徒が、式典の会場準備を仕切っている女性の教員に『先生！何か仕事ないかな、俺、先生のためだったら、何でもするぜ』と周りを爆笑の渦に包みながら、気持ちよく仕事をしてくれました。松高生の純粋さの片鱗を見せてもらったようで、心の中をさわやかな風が吹いていったような心地良さを感じました。

これからもより一層、村松高校に誇りを持って、勉学に、スポーツに励ませたいと考えています。職員一同、21世紀を担う人材を育てる覚悟で教育活動に励んでおります。

また、昨年は第54回定期大会にお招きをいただきまして、大変ありがとうございました。多くの同窓会員の皆様と楽しいひとときを過ごすことができました、思い出の一日とすることができました。今年も東京で皆様方にお会いできることを楽しみにしております。

私は昨年の4月に校長として着任しました。早いもので、もう1年に手がかかろうとしております。着任した4月当初は、創立100周年であるとお話を伺い、その歴史の長さに感嘆したと同時に、100周年記念式典のことが常に頭のどこかに居座って気にかかっておりました。

私は、昨年4月の始業式で、生徒に次のような内容のことお話しいたしました。人生にはいろいろな出会いがあります。誰々君と友達になったというような出会いや今回の小池先生と松高生のような直接的な出会いのほか、本を読むことによって、その本の著者や登場人物に出会うという間接的な出会いもあります。人は人生にお

鈴木 重行

いて、優れた出会いが多ければ多いほど成長出来るものです。人生100年生きる事が出来たとしても、100年間で直接出会うことが出来る人には限りがあります。だから、良い本を沢山読んでほしいのです。

本は1冊読むことで、最低でも著者と主人公には出会うことができます。素晴らしい名著を読むことは、100人の偉人に直接出会うことに匹敵するかもしれません。だから、良い本をたくさん読んでほしいと話しました。

私自身は、大きな出会いが今から20年前にありました。私を本物の物理教員に育ててくれた竹沢先生との出会いです。竹沢先生は、新潟県立高田高等学校の校長を最後に、定年し、残念ながら1年後に、癌に命を奪われてしまいました。

竹沢先生は物理学の博士号を高校教員をやりながら取得し、我々若手理科教員をたくさん育ててくれました。今でこそ新潟県でも普通に行われている『青少年のための科学の祭典』を新潟県で初めて開催できたのも竹沢先生のご尽力があったからです。『新理科教研（新しい理科教育を研究する会）』に私が初めて顔を出したことが竹沢先生との出会いでした。その後、新潟市の竹沢先生宅に泊めて頂いたり大変お世話になりました。竹沢先生は顔は大変にこやかで、にこにこしながら、厳しいことを言うのです。彼は、当時30代前半の私に、『研修は金を払ってでも行け。県外へ、世界へ出て研修しろ。レポート発表は年3回以上、読書は1日100ページ。』あまりにも厳しい内容です。なかなか竹沢先生の要求には応えられませんでした。生徒に直接、物理を教えることから離れてしまった今でも、読書を1日100ページだけは守っています。50才を過ぎた今まで、20年間も1日100ページの読書をしようと頑張ってきたのも竹沢先生との出会いかなと思って感謝しています。今年もまた、36600ページへの挑戦が始まります。

今の松高生にも誇りを胸に生きていくために、たくさん本を読んで、いろいろな人と優れた出会いを経験してほしいと願っています。

皆様方の母校の村松高等学校が輝かしい歴史を刻んでいけるように、今後ともなお一層のご厚情を賜りますようお願いを申し上げまして、新年のご挨拶とさせていただきます。



村松高校東京同窓会・第54回大会開催

6月12日正午から、九段下のホテル グランドパレスにおいて総勢100名が集い、第54回定期大会が開催された。来賓として母校からは鈴木重行校長と田部健一先生（進路指導）、同窓会本部からは相田 豊会長、阿部律雄・浅田光雄両副会長、事務局3名を迎え、徳永道子・安中信夫両幹事の司会で進行。

郡司正大実行委員長の開会の言葉で大会第一部の幕を開け、鈴木多喜男東京同窓会長の謝辞と挨拶の後、相田同窓会長からは母校創立百周年記念事業への、鈴木校長からは母校の現況とあるべき姿への、それぞれ挨拶と支援のお願いがあった。

来賓挨拶の後、総務・財務・広報の各委員長からの一年間の活動報告を承認。

広報委員 石黒 勝夫（高14回）

最後に会則の改正を承認して第一部を終了。

第二部は、飯吉 高さんが垂季子夫人（大橋貞夫広報委員長の娘さん）のピアノ伴奏でトランペットを演奏。出席の皆さんはトランペットの活気あふれる華やかな音色と明るい音質をしばし堪能。

第三部の懇親会は、杵渕政海先輩（二回生）の乾杯の音頭でスタート。創立百周年を迎える母校の思い出話や同期生のその後の消息などを語り合っ懇親を深め、やがて、恒例のお楽しみ抽選会が始まると会場内の雰囲気も最高潮に。

最後に校歌・応援歌を合唱した後、渡辺八郎副会長の手締めで閉会。その後の二次会へも大勢参加して大いに盛り上がった楽しく有意義な一日だった。

東京同窓会・第54回大会収支決算書

平成23年6月12日（土） 於 ホテルグランドパレス

収入の部					支出の部			
項目	内訳	人数	金額	合計	項目	内訳	金額	合計
①懇親会費		87名	8,000	696,000	①懇親会費	100名		753,310
	男子61名					酒類		35,000
	女子26名					ピアノ・調律・他		50,000
					②謝礼・花束			55,000
②祝儀	校長・教諭	2名	20,000	80,000	③本部対応費			16,200
	同窓会本部	6名	60,000		④準備費			82,645
						会議費会館使用料	38,320	
③会員寄付		3名		18,000		通信費、切手	20,000	
	篠川 恒夫		7,000			送信、宅配	3,430	
	笠原 静雄		9,000			コピー・紙・インク等	5,760	
	佐々木恵美		2,000			宛名シール	2,880	
						発送用封筒	5,090	
④二次会残金				2,000		二次会用リボン等	7,165	
合計				796,000	合計			992,155
	(一般会計から補填)			196,155				
総計				992,155	総計			992,155



山城健児ここにあり！



杵渕さんの乾杯!!



飯吉夫妻のトランペット演奏

第54回 東京同窓会出席者名簿

成23年6月12日(日)

於 ホテル グランドパレス 3F「白樺」

新潟県立村松高等学校東京同窓

来 賓 (10名)	旧中・旧女 (6名)	高 校	高 校	高 校
村松高校同窓会 会長 相田 豊 様 (高9) 副会長 阿部 律雄 様 (高20) 副会長 浅田 光雄 様 (高20)	25 一氏 愛子 25 大橋 也子 25 近藤 昌子 25 佐藤 治 25 佐藤 玲子 25 鈴木 節子	06 畔田 昭義 07 加藤 喜七 07 深見 洋子 07 宮川 裕皓 07 八木 又一郎	12 今井 英雄 12 高岡 五百子 12 徳永 道子 12 中村 雅臣 13 金子 健二 14 石黒 勝夫 14 猪口 成吾 14 漆原 茂 14 落合 三枝子 14 片山 徳子 14 加藤 延雄 14 熊倉 道雄 14 田澤 智子 14 山田 俊治 14 横溝 美枝子 15 高岡 光夫 16 郡司 正大 16 服部 修治 16 森田 勝美 18 青木 敏和 18 笠原 静夫 18 斉藤 正義 18 羽下 力 18 三室 茂和	19 五十嵐 勝栄 19 石黒 久七 20 安中 信夫 20 安達 繁子 20 石井 清和 20 重黒木 賢二 20 三宅 紀子 20 宮腰 和男 20 宮崎 信次 20 吉田 晴男 22 阿部 モヨ子 22 斉藤 公明 22 柴野 暢夫 22 滝沢 義則 22 平山 誠一 22 松澤 綾子 22 山田 俊治 25 林 信子
村松高等学校校長 鈴木 重行 様 村松高校教諭・進路指導 田部 健一 様	高 校 (83名) 02 杵渕 政海	08 岡部 ユキ 08 片柳 ムツ 08 木村 孝子 08 久我 マキ 08 小出 博三 08 鈴木 輝雄 08 塚田 勝 08 治田 レイ子 08 山崎 輝雄 08 吉井 清		
村松高等学校事務局 熊倉 洋子 様 酒井 加代子 様 熊倉 富美子 様	03 小池 生夫 03 瀬倉 武志 03 渡辺 八郎	08 久我 マキ 08 小出 博三 08 鈴木 輝雄 08 塚田 勝 08 治田 レイ子 08 山崎 輝雄 08 吉井 清		
トランペット奏者 飯吉 高 様 ピアノ奏者 飯吉 亜季子 様	04 榎並 秀栄 04 梶屋 庄佑 04 坂上 卓夫 04 鈴木 健司 04 鈴木 多喜男 04 二宮 文三 04 山田 幸子 04 吉井 久夫	09 阿部 勇 09 石黒 四郎 09 増田 訓英		
津川高校 (1名) 樋口 雄一 様		10 大橋 貞夫 10 小島 典子 10 近藤 尚志 10 新保 優 10 真水 道子		
出席者計—100名	05 金子 鶴男 05 佐々木 恵美 05 高濱 つる子 05 向山 律子 05 山崎 豊吉	11 佐藤 赳		



54大会の名司会者 安中・徳永の両幹事
大変お疲れさまでした！

平成24年度 松高東京同窓会開催 のお知らせ

◆日時 24年6月2日(土)

正午開会

◆場所 アリス アクアガーデン品川

港区港南2-16-5 三菱重エビル

グランパサージュⅡ3F

Tel: 03-3450-8810

交通 ●JR「品川駅」港南出口より

徒歩3分

母校百周年記念行事に参加して

明治44年(1911年)3月、我が母校 新潟県立村松高等学校(当時新潟県立村松中学校)が創立されました。

今年100周年を迎え、10月1日(土)、母校を主会場に次のような記念行事が行われました。

記念式典には、ご来賓をはじめ、同窓生、保護者、旧職員、現職員、在校生が参加し、厳粛に挙行された式次第を見守りました。

東京同窓会からは、「母校応援バスツアー」(1泊2日、21名参加)を組むなどして、約30名の会員が記念事業に列席しました。

○ **記念式典** 本校第一体育館(9:30~10:30)
(冒頭、創立100周年賛歌「誇りを胸に」が披露される。)
次第

1. 開式の辞
2. 黙 祷
3. 国歌斉唱
4. 実行委員長挨拶
5. 学校長式辞
6. 祝 辞

新潟県教育委員会 様

五 泉 市 長 様

7. 生徒代表よろこびの言葉
8. 祝電披露
9. 校歌斉唱
10. 閉式の辞

○ **記念講演会** 本校第一体育館(10:40~11:50)
講師: 島田洋七氏(タレント)
演題: 「挫折にめげず自分の道に挑戦した私」

○ **記念碑除幕式** 本校玄関前(12:05~12:20)

○ **記念祝賀会** さくらんど会館(13:15~15:15)
創立100周年記念賛歌「誇りを胸に」
[合唱] 村松合唱団
[演奏] 村松吹奏楽団

次第

1. 開式の辞
2. 実行委員長挨拶
3. 祝 辞

五泉市議会議長 様

歴代校長代表者 様

4. 鏡 開 き
5. 祝 宴
乾 杯
万歳三唱
6. 閉式の辞

参 加 者 の 声 —卒業年次順、敬称略—

10月1日に挙行された、母校の100周年記念行事に、東京同窓会から参加された会員から、その声が寄せられましたので、以下にご紹介します。

慶 賀 ・ 創 立 100 周 年 記 念

—久しぶりに君が代と校歌を唱う—

高4回 山 田(旧姓澤田) 幸 子

9月30日(金)朝、東京・池袋西口「芸術劇場」前出発の**母校応援バスツアー**は、21名(高4回~高25回生)を乗せて、首都高速より一路東北道へと進む。途中**野口英世記念館**、新装の**鶴ヶ城**を見学(災害の影響で、何処も観光客の姿はまばら)。生憎の雨に、会津磐梯山、猪苗代湖もかすみ、真っ赤なナナカマドや薄(すすき)の群れに秋の闌(た)けりを感じる。

暮れて今宵の宿「柳水園」へ到着。同期会とはまた違った後輩達との出逢いの場を体験する。

10月1日(土)朝、宿を発ち母校へ。記念式典に続き講演、記念碑除幕、祝賀会等が挙行された。

祝辞=メモの棒読みではなく参列者に生きた言葉で語りかけて欲しかった(肩書きが泣く)。

記念講演=先頃のヤクザ関係で抹殺された者との漫才芸人は家族ぐるみの中(本人が言う)。祝典の場に相応しいのか?同窓、縁者でもない。謝礼¥100万?招く側との意識のズレを感じる(何故なら、寄付をした後すぐに又請求があり、不信感を抱く)。

祝賀会=懐かしいお顔の数々にお逢い出来嬉しい限り。皆、素敵に年を重ねて居られた。下は正面玄関の垂れ幕



まなびや

学 舎 は「塵の巷を遠ざけて」

高8回生 高 地 彰

懐かしい正門の松の木立。国の有形文化財に指定されたという門柱。58年前にこの門をくぐり、3年後に門を後にして幾星霜……。

百年祭というので、この世の見納めにと同窓生と連れ立って出向きました。大きな国旗を掲げた演壇で、各界名士の式辞を拝聴。盛大な式典でした。強い印象は次の

言葉です。

「旧制中学の校歌に、〈塵の巷を遠ざけて〜〉とあるのは、学問の府は世間の喧騒を避けて静かな環境の中で行う可しという先達の教えであり、広く世間を見渡しても、学府はいつの時代も郊外に設立したもの。交通の便が悪いからと、学校を移すのはいかげなものか……」という第22代校長瀧澤強様のお話でした。

小生らは、雪のない時期は白線二本の学生帽に詰襟の服、腰には手拭、高足駄という出で立ち。冬にはマントを翻し、弊衣破帽の3年間でした。そこで得たものは先輩が築いた質実剛健の気風と偏屈なほどの真面目さでした。

先輩の背中を追って過ごした半世紀は夢のようです。

母校 100 周年行事に参加して

高8回 吉 井 清

55年ぶりに校門をくぐった。卒業してから半世紀余、幸運にも健康で母校の100周年記念式典に参加できるとは感慨もひとしおだった。

趣のある木造の校舎は偲ぶべくもないがこれも時代の趨勢である。現役の学生数も激減で時の流れを感じずにはいられない。ここ2年位学校の就職活動バスで上京した卒業予定者と面会したが、最近の風聞も含め生徒たちの元気のなさを感じていた。

今回の式典に参加して式場に入る参加者を最初に接待してくれた生徒たちは、大きな声で挨拶しテキパキとした対応で清々しく、また、式典での生徒たちも節度ある行動だった。豊かな自然の中での母校も激しい時の流れに少し戸惑ったこともあるが、この100周年記念式典を契機に式典のテーマ「誇りを胸に」と共に伸びやかにその足跡を重ねてくれるものと信じている。

最後に私にとっては大変意義のある式典参加でした。このツアーを企画してくれた幹事団には衷心よりお礼を申し上げます。 下はさくらんどう会館での祝賀会



越 後 一 会

高11回 佐 藤 越

「一期一会」一生に一度限り又はその縁。

村松での一度限りの縁になるかも知れないとの思いで、

村松高校100周年記念バスツアーに参加して参りました。

最初の出会い、宿の柳水園の部屋割後に入室してすぐに、床の間に作家青木雨彦の逗留の際詠んだ句「越後一会」が飾ってあり、もうまさにその通りだと感じました。

翌日は出会いはないと思っていたところ、11回生2人、名前と顔が分かるのに時間を要したが、卒業以来語らえたことが出来、さらに、在学時、芝生の下宿先へ押し掛け、夜遅くまで語らった恩師にもお会い出来、昔話に花が咲き、喜んでおられたのが印象的でした。

それぞれ「一期一会」にならないよう、交流が出来れば良いのですが、この100周年記念バスツアーが「越後一会」に、幹事さんに感謝、感謝、素敵な2日間でした。

母校 100 周年記念行事に参加して

高12回 徳 永 道 子

10月1日記念式典当日天候が危ぶまれる中参加いたしましたが、有難いことに天気予報が外れ、時々青空も覗く天気になり本当に良かったと思いました。

すっかり様変わりした校舎、天井の高い広々とした体育館、そこで執り行われた100周年記念式典、ステージには真新しい緞帳が架けられ、その色合いは薄紫のなかなか格調高いものでした。現在の在校生は本当に幸せだなあとつくづく感じました。

村松合唱団のコーラスから始まり、「創立100周年賛歌 誇りを胸に」が披露され、「赤い煉瓦の正門に」とか「情熱注いだ臥龍祭」とか「質実剛健我が気概」などなど、一番から三番までの終わりには「嗚呼わが学び舎にありがとう」と歌われ、最後には「ああ我が松高 誇りを胸に」と自分の高校生時代や青春時代を思い出し、感慨深いものがありました。その後、式典は滞り無く厳かに進められました。



村松吹奏楽団による演奏 祝賀会場にて

式典会場である第一体育館を出て昇降口より第二体育館に通じる長い廊下を歩きながら、昔は二・三段のコンクリートの階段を降り、長いコンクリートの廊下を歩いたことを思い出していました。冬などはこのコンクリートの廊下が冷たく寒々していた事を……。

正門と同期生との再会

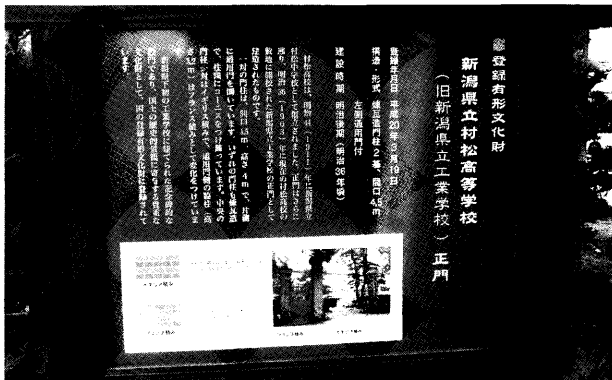
高14回 石黒勝夫

49年前に卒業して以来の母校訪問です。創立100周年を迎える母校の記念行事を見届けようと、鈴木会長に相談して「母校応援バスツアー」(1泊2日)を企画し、先輩・同輩・後輩総勢21名でふるさとへ向いました。

前泊の咲花温泉では雨でしたが、式典当日は秋日和の爽やかな晴れ、天も100周年を祝福してくれました。

貸切バスが母校に到着、まず目にしたのは正門です。

朝夕、自転車での登下校の際には必ず通り、馴染みのある正門です。平成20年3月に国の有形文化財に登録された貴重な建造物で、思わず「只今帰りました」と、心の中で挨拶しました。



校門の登録有形文化財説明板 門の左側に設置
もう一つは、地元の同期生8人の面々との再会です。東京からはるばるやってくるから集まったということで、東京から参加した3人を含めて同じテーブルに座り、ミニ同期会さながらの嬉しく楽しいひと時でした。来年は古希の祝いとなります。その集いを今から楽しみです。

村松高校100周年記念式典に参加して

高18回 青木敏和

母校創立100周年記念式典に東京同窓会応援バスツアーで9月30日に池袋・東京芸術劇場前に集合、21人で9時30分定刻通り出発。石黒勝夫幹事の手配による2本の幟旗「村松高校東京同窓会」を持参し、事あるごとに掲げ、宿泊先の五泉咲花温泉へと向いました。バスの中は先輩・後輩分け隔てなく楽しいサロンバスで、出発早々アルコールに盛り上がり、東日本大震災の被災地福島県野口英世記念館、鶴ヶ城も、人気無く気の毒なくらいの観光客でした。夕方、ほぼ予定通り咲花温泉「柳水園」に到着。温泉に浸かり宴会に入り、全員の自己紹介に始まりカラオケで盛り上がり、やがて終宴。終わってからタクシーで五泉市内のスナックまで出掛けた方も2人おられたようです。

翌朝早く5時に起床し、温泉に浸かった後、阿賀野川縁を散策しました。空気の美味しい咲花でした。

朝食後、バスで記念式典会場の村松高校に到着。幟旗を掲げて式典会場の体育館に入場。在校生の他来賓者を代表して相田 豊同窓会長の挨拶があり、講演者島田洋

七氏による「挫折にめげず自分の道に挑戦した私」と題した面白おかしい大変有意義な話しでありました。

記念碑「誇りを胸に」の除幕式が玄関前で行われ、その後、会場をさくらんどう会館に移して記念祝賀会が行われ、卒業以来の再会者に、また、私にとって初対面といってもよい憧れの高井恵美子さん(高8回)にお会い出来たことです。高井さんは父同士が仕事の関係でお世話になった方でした。

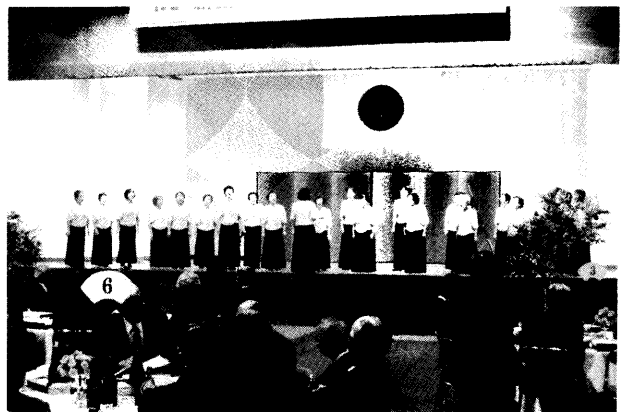
帰りのバスも順調に池袋に着き、私は静岡へと帰りましたが、石黒先輩には最後までお世話になり有難うございました。今回の式典も大成功に終わったと思います。母校が益々の伝統と歴史を積み重ねることを祈ってやみません。

母なる松高、同窓生を誇りに思う

高25回 林 信子

この大切な節目の行事に、先輩方と1泊2日の小旅行に参加でき、とても有意義でした。村松の実行委員会の方の準備もさぞかし大変だったと思いますし、細かい心配りでバスツアーを企画してくださった石黒勝夫先輩の名幹事ぶりにも本当に尊敬いたします。有難うございました。大きく大変だった分、充実感や達成感は素晴らしいと思います。ひとつひとつ今、出来る限りの事はやりたいですね。

私事です、今回のサプライズは、15年ぶりに村松在住の五泉中学校3年生担任の女性教師のお顔をセレモニーの合唱団の中に見つけたことです。思わぬ再会に女性同士の気安さで、大きくハグしました。80歳を少し越えたであろうそのお姿は、背筋がきちんと伸び、お声も素敵でした。国語と音楽を教えていただきましたが、バレーボールと書道が好きということも共通していて、先生とお話するのは楽しかったです。人として、女性として、妻として、母として沢山の言葉より、創立100周年賛歌を合唱団の一員として、舞台中央に立たれていた恩師の姿は忘れられないものとなりました。



「誇りを胸に」村松合唱団 恩師の姿に涙ぐむ

私が現役高校生の時は、創立60周年だったことを、今記憶の中から少しずつ見えてきました。本当に楽しい3年間だったので、母なる松高ありがとう。

母校応援バスツアー（報告）

石黒 勝夫（高14回）

母校の創立100周年記念行事に列席し、母校の歴史を振り返りながら、在校生が学ぶ姿や今後の母校の進む方向を現認して、これからも母校を応援しようと、21名の会員の皆さんが「母校応援バスツアー」（1泊2日）に参加しました。

- 催行月日 平成23年9月30日（金）～10月1日（土）
- 参加人数 21名
- 参加者氏名（卒業期別、50音順、敬称略）

（高4回）梶谷庄佑、下野文幹、鈴木健司、鈴木多喜男、山田幸子（高5回）向山律子（高8回）高地彰、山崎輝雄、吉井 清（高9回）石黒四郎（高11回）佐藤 赴（高12回）徳永道子（高13回）波多野紀子（高14回）石黒勝夫、山田俊治、横溝美枝子（高16回）郡司正大（高18回）青木敏和、斎藤正義（高20回）石井清和（高25回）林 信子

○ 行程

<1日目 9月30日（金）>

東京・池袋西口/出発——高松 I C——（首都高）——浦和 I C——（東北道）——佐野 S A（休憩）——那須高原 S A（昼食/休憩）——猪苗代磐梯高原——野口英世記念館（見学）——鶴ヶ城（見学）——（国道49号線）——咲花温泉：柳水園（宿泊）



佐野サービスエリアにて



鶴ヶ城にて



柳水園での楽しい宴会

<2日目 10月1日（土）>

咲花温泉：柳水園——村松高校創立100周年記念式典等出席——安田 I C——（磐越道）——新潟中央 J C T——（北陸道）——<長岡 J C T>——（関越道）——越後川口 S A——赤城高原 S A——三好 P A——練馬 I C——（外環道）——（美女木 J C T）——（首都高）——西池袋 I C——東京・池袋西口/到着



母校へ出発前 柳水園をバックに勢ぞろい

参加費残金 42,671 円を東京同窓会に寄付

母校応援バスツアーの決算の結果、42,671 円の残金が生じました。参加者21名全員の総意として東京同窓会に寄付することとなり、10月26日、振り込みました。

<収入>

- | | |
|-----------------------|----------|
| 1. 参加費（1人25,000円×21人） | 525,000円 |
| 2. 寸志（副会長 金子鶴男様） | 10,000円 |

<支出>

- | | |
|--------------------------------------|----------|
| 1. 往復団体貸切バス（中型・ワンマン） | 168,000円 |
| 2. 柳水園宿泊代（1泊2食） | 187,050円 |
| 3. 昼食（那須高原 S A、那須御膳） | 23,760円 |
| 4. 有料道路使用料（2日間、大型） | 23,950円 |
| 5. 柳水園での懇親会（飲み物） | 36,278円 |
| 6. その他（バス車内での飲み物、野口英世記念館観覧料、国内旅行保険等） | 53,291円 |

差引残：42,671 円

老人ホームでの出会いと別れ

山西 愈佐子 (高8回)

「二時半から朗読の時間が始まります。ご希望の方は、三階の集会室にお集まりください」職員の放送が全館に響きわたる。

朗読サークルの仲間と二人、手の消毒を済ませエプロンとマスクをつける。三階の集会室で細長いテーブルを四台、お互いの顔が向き合うように四角に並べ、マイクをセットすれば準備完了である。参加者の名札を持って、一階と二階の居室に声をかけ、三階まで案内することから始まった。

ここは東京都の西郊にある病院、ホスピス、教会、デイケアセンターに併設しているY特別養護老人ホーム。毎週水曜日、午後のひと時である。

今日の参加者は十五名、殆どの方が車椅子で、そのうち一人が歩行器を使い、もう一人の方は自分で歩いた。

冬とは思えない穏やかな日差しが入る会場で、師走の街の様子などを話したあと、一時間ほど本を読む。

内田百閒の『百鬼園随筆』から〔明石の漱石先生〕池波正太郎の『日曜日の万年筆』から〔年の暮れ〕仲間、出久根達郎の『古本屋歳時記』から〔風流な人〕‘02年ベスト・エッセイ集『像が歩いた』から浅田次郎の〔学問〕など。

ホームに居る方々と時代を共にした、あるいは広く知れ渡っている作家の作品が喜ばれた。日頃あまり発言をしない人も、作品の内容や昭和の出来事、食べ物、暮らし振りなどに話が弾み、和やかな空気に満たされていくのが楽しい。

ホームで朗読をするようになって二十年あまり経つが、その間、朗読で馴染みになった方々数十人が、他界されてしまった。故人になられた方の中で、印象に残っている数人の方をご紹介します。

☆Sさんとの初対面は、十八年ほど前。長身でどこことなくイナセな感じの彼は、当時六十代後半で東北出身。糖尿病と脳梗塞を患い、右半身と言語が不自由になっていた。しかし、自分から発言し、自分で歩こうという意志をしっかりと持ち、いつも歩行器の助けを借りながら五年近く、車椅子になってからも三年ほど朗読会に参加していた。「やりたい放題だったから、こんなザマだ。みんな、今から身体に気を付けたほうがいいよ」自分と同じ轍を踏まないようにと、もう若くない私達をいつも気遣ってくれる優しい人だった。

ホームの中庭の落葉樹がすっかり葉を落とし、木枯らしが吹き始めた頃、「正月は家へ帰るんだ!」と、全身を喜び一杯に溢れさせて話した。彼が家族と共に正月を過ごす姿を想像し、私達も安堵した。

何年か過ぎ、病状が少しずつ進んできた或る年の暮れのこと。「女房と娘に世話をかけるから、正月は家に帰ら

ない」と、Sさんは肩を落としていた。頬はこれまでになくやつれ、身体の不調がありありと見てとれた。私は沈む思いを抱えて、ホームに備え付けの活動ノートにそれを記録した。

その後、朗読会場までの移動も叶わなくなり、気分の良い時は、ベッドサイドでの話し相手になったりした。故郷の仙台の話にふれると、途端に表情が和らぎとても喜んでくれた。

数ヵ月後、多くの思い出を残して、Sさんは昇天した。

☆居室への送り迎えの時、顔をくしゃくしゃにして笑い、両手を合わせて挨拶してくれたAさん。「私の補聴器はどこ?」と一緒に探すことがいつもの習慣だった。

そんな或る日、「私百歳になったの!」と満面の笑顔で報告を受け、「おめでとうございます!」と手を取り合っ

て祝ったのは、つい昨年のことであった。

あの生き生きとした、無邪気な笑顔が忘れられない。

☆ある出版社の編集部で、高名な女流作家の係りをしていたと言うMさん。話したいことが山ほどあったようだが、言葉が出にくく鬱々として、自由に話せない苛立ちと落胆の色がありありと見えた。そんな様子を看ても特別なことが出来るわけも無く、そっと寄り添いながら、意志の疎通が出来ることのありがたさと、彼女の寂しさに想いを寄せる数年であった。

☆昭和十年代、声楽の勉強のため横浜から船でイタリアに行き、帰国後、二期会でオペラを歌っていたHさん。

晩年は視力をなくし、車椅子での生活をおくっていた。病軀でありながらも凜とした佇まいを残し、華やかであったであろう往時の面影をにじませていた。彼女から感じ取れる様々な余韻が、私を惹きつけてやまなかった。

「いつも音楽が私の中にあるの…」ある日、ポツンと漏らしたその言葉が、彼女の想いのすべてを物語っていたように思う。

仕事に家庭に子育てにと全力を尽くし、厳しい時代を生き抜いてきた人達……。長い年月が刻んだ、それぞれの歴史のあと。私は、朗読を通して、数十人の人達とのさまざまな出会いや別れを体験してきた。そして現在も続けているが、そのことは心の糧となって、私の中に棲みついている。そこから得た心の豊かさは、私の人間性を形成する上で計り知れない力になっている。

人は誰でも、いつかは生涯を閉じる時が必ず訪れる。長寿が無条件でめでたいなどとは、もはや言い難い世の中になってしまった。

ホームでの限られた環境の中で、その境遇を受け入れ、順応している方々は、温和な表情をしていた。

他方、自分がおかれた境遇を受け入れられず、その苦しみを絶えず表に出している方がいたのも事実である。

最近、私も心身共におぼつかなくなってきた。今年、後期高齢者の仲間入りを

四国遍路を歩く

落合 三枝子（高14回）

テレビで遍路の番組を見たことがきっかけとなって、四国遍路に踏み出して以来10年余、夫と二人で毎年春になると四国に向かいます。

リタイヤしたら遍路を、と夢見る人も多いと聞きます。夢をかなえつつ、ウォーキングを兼ねて楽しんでいる人が多いのもたしかです。私たち夫婦も健康、観光、信仰と、最後に信仰が付いて来るといったところです。

でも、出会った人との間わず語りの話しの中で時々聞くのは、男性の一人遍路の場合、妻に先立たれ、寂しく無念、自分は何もしてやれなかった。それどころかむごいことを言ってしまった。など、自分を責める思いの人が多いようです。女性の場合は家庭のしがらみや人間関係から抜け出したい。また逃げ出してきた、家事はもうたくさん。などと、ストレスをいっぱい溜めこんでいる人が案外多いように思います。

遍路に踏み出すまでの一歩には勇気がいりますが、案ずるより産むが易しの例えのように、歩き始めれば、四国の方は、車ではなく歩き遍路には特に優しいのです。思いがけずお接待を受けたりすることがあって、有難いという気持ちがごく自然にわいてきます。

信仰心の薄かった夫でも、足の痛みに耐えながら歩き続ける人に出会ったりするうちに、自分を健康な体に住んでくれた両親に感謝する気持ちから、信仰心も自然に芽生え出てきたように思います。

道中は心細い時もありますが「同行二人」お大師様がいつも付いていて下さる。そんな気持ちがいつの間にか

私が長期間家を空けることはできないので、ほぼ1週間から10日ほどで帰るように、区切り打ちをしています。

私は6回目ようやく総距離およそ1300キロ、88番大窪寺まで結願することが出来ました。そのままスタートの、1番、竺和山霊山寺へお礼参り、高野山奥の院をもお参りでき、さらに現在は2巡目に入っています。

今年は修行の道場と言われる土佐路を31番、五台山竹林寺（高知市）から、足摺岬の38番、蹉蛇山金剛福寺までおよそ200キロを歩くことができたのも、健康と夫のお陰と感謝しています。

広い空の下、緑の匂いを感じながら小さな川を渡る時、村松の我が家の近くを流れていた城川をふと思い出したり、山あいを走る2両連結の電車に蒲原鉄道が重なって、懐かしさを感じることもありました。



24番札所「室戸山最御岬寺」に向ってひたすら歩く
（2010年4月）

私にとって遍路の楽しみのひとつは人との出会い、邂逅でもあります。今年も心に残るいくつかの出会いがありました。

曾祖父様が明治12年に歩いた時の納経帳が見つかったので、その足跡を辿ってみようと、現在住んでいる大阪からやって来たという方。その方は、初めて親元を離れて上京した時住んだのが、何と、私が今住んでいる家のすぐ近くだったのです。また、走って日本中の岬廻りをしているという、同年代の女性には驚嘆し、そのパワーも戴いた気がします。そして、亡くなられたご主人との約束を果たしたいと、北海道から一人で来られた75歳の女性との親しい交流も生まれました。

ハイテクの時代となり、世の中がどんどん変化して行くなかで、アナログお遍路を通じて、人の優しさと豊かな自然は、出来るだけ変わらないで欲しいと思います。

そして日本の伝統やしきたり、文化や知恵の素晴らしさを、最大限次の世代に伝えて行きたいと、強く思っております。



30番札所「百々山（どどざん）善楽寺」にて
（2010年4月）

抵抗なく自分のものになっているのも不思議なことだと思います。

朝早く起きて歩いて、札所のお寺でお参り、また歩く。宿に着いて早めの就寝。ひたすらこの繰り返しですが、いつしか心地よく感じられていることに気づくのです。

感 無 量

佐藤 赳 (高11回)

平成十七年、仕事始めの正月四日の電話から始まった。郵便局退職後は民間会社に勤務。当日の勤務を終え帰宅した途端、最終職場の渋谷郵便局の担当者から電話があり「今般、瑞宝単光章の候補に上がりました。よってこれから健康に注意の上過ごされますように。又、ご連絡致しますが、この件はご家族以外漏らさないで下さい。おめでとうございます」と、突然の電話に、最初は何の事やらさっぱり分らず、ただ驚くやら吃驚するやらでした。しかし、春の叙勲が近付いても何の音沙汰も無く、もう無いものと忘れていました。

栄典制度の成り立ち

栄典制度と云うのは簡単に言うと位階や爵位、勲章や褒章や記章などを受ける制度のことです。「栄」とは栄誉のこと、「典」は本来書物のことを示し、規則を意味する。故に「栄典」とは栄誉を称えるきまりを言い、日本ではこの栄典制度の下で勲章・褒章などが授けられています。

勲章、褒章とは

昔から、国のために力を尽くすことを「勲」とか「功」と書き、いさお・手柄のことを言います。章は「音」と「十」の文字を組み合わせて、しるしの意味になりました。勲章と云うのは「国の為に手柄のあったしるし」で、「褒めすすめるしるし」が褒章です。

国民栄誉章とは

栄典制度による褒章などと混同され易いのが「国民栄誉章」です。昭和五十二年(1977)に時の総理大臣福田赳夫によって発案され、その年の八月三十日「広く国民に愛され、社会に明るい希望を与えた人」で、総理大臣が適当と認めた人が表彰されることになりました。

日本の勲章制度

明治八年(1875)の太政官布告と共に作られ、旭日章・瑞宝章・宝冠章とあり、それぞれ勲一等から十二等級等までありました。

最初に設けられた旭日章は男性用、次に宝冠章が女性用に、また同時にできた瑞宝章は男性用でしたが、大正になって女性にも適用された。また、平成十五年に改定されて数字による勲等が廃止、平成十七年から簡略化され、大勲位菊花章、宝冠大綬章、桐花大綬章、旭日大綬章、瑞宝大綬章と旭日重光章(中綬章、小綬章、双光章、単光章)と瑞宝重光章(中綬章、小綬章、双光章、単光章)とに制定されました。

通 知

九月の終り頃、文章による通知書「最終候補になりましたのでお知らせします。再度連絡まで健康と事故に気を付けて下さい」が届いた。この時点で事故が気になり車の運転を控え、未だ不安で以前受賞された方にそれとなく訊いた所、それは「決定」だと言われ、驚きと戸惑

いを覚えました。更に出席には夫人同伴で和服か礼服の着用とあり、大騒ぎで準備を済ませホッとしていたら、今度は宅急便や郵送で綬章祝品のカタログが次々と届き、何処で名簿が洩れたのか、もう驚きの連続でした。

伝達と拝謁

当日、中綬章以下の郵政関係者は(郵政省は郵政公社となり総務省の管轄になる)総務省関係の綬章者と赤坂プリンスホテルに集合し、総務大臣より伝達(勲記と勲章)を受け、全員勲章を付けてバスに乗り、皇居新宮殿の豊明殿に於いて天皇陛下に拝謁、代表がお礼を言上し、陛下より労いと激励のお言葉を賜った後、各綬章ごとに記念写真を撮り、菊の御紋入りお菓子などの下賜品を戴き皇居を退出したが、朝早くから本当に長い一日でした。



平成17年秋の叙勲 勲章伝達式(竹中大臣)

勲記とは

叙勲にあたっては、その内容を明記した証書と一緒に授与され、それを勲記と言います。

明治九年に書式が定まり、現行の勲記は昭和二十四年から天地42cm、左右59.4cmの特漉き用紙を用い、中央上方に菊の御紋章、下方に授与される勲章の原色別になっています。これには次のように書かれています。

「日本国天皇は【叙勲者名】に【勲章名】を授与する皇居において璽をおさせる」

次の行には「御名国璽」があって、以下年号と月日、内閣総理大臣と内閣府賞勲局長の副署押印となっています。用いられる国璽は「大日本国璽」とあり、勲記だけに使用されるものです。純金製の一边が91mmの立方体で、重さは3.55kgあり、押さずに置くだけで印影が写るそうです。なお、勲記の再発行はありません。

綬章して

綬章したことは、私一人の力ではなく、今まで永い間仕事に携わった諸先輩や同僚、後輩の皆様方に恵まれたお陰であり、何よりも永く仕事を続けて来られたのは家族の協力があればこそで、いろいろとお力添えを戴いた皆様には心から感謝を申し上げたいと思います。

私もいつの間にか七十歳を超えてしまいましたが、皆様のご恩に報いるため、今後とも微力を尽くしたいと願っております。どうか末永くご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

漂流民三之助の物語

熊倉道雄（高14回）

息子が青森に住み着いて11年余りになる。青森に縁ができてからというもの、とにかく、旨いものと自然と独特の歴史文化を求めて、家族でよく旅行するようになった。かつて、職場の句会に「太宰忌や「北のまほろば」読み返す」なる駄句を投稿したのはいつ頃のことであったか。特に自然が好きだった亡妻は、しばしば姉達と一緒に、まだ独り身であった息子にアテンドさせて、奥入瀬・十和田・八甲田やその周辺の温泉地を巡った。

今は息子夫婦に、まるで妻の生れ変りのように生れてきた3歳半の孫娘と1歳半になるその妹の一家4人が青森市内に暮らしている。遠く離れて暮らす幼い孫たちとの付き合いは、メールなどのコミュニケーション・ツール進化があるとはいえ、遠距離交際(?)みたいなもので、なかなか容易なことではない。やはり実際に会って接するに如くはなく、このところ、理由を見つけては出かけている。この間も、上の孫娘の保育園の「おゆうぎ会」があると聞いて、早速、青森へ飛び、数か月ぶりの交流を楽しんだ。

ところで、予定もすべて終わり、あとはひとりで帰るだけという翌日、時間潰しにと思って、ホテルにすぐ近い県立郷土館に立ち寄ったのだが、そこで思いがけず出会ったものは、「青森と北方世界——三之助とタタリーノフ」なるコーナーであった。

コーナーの大きなパネルには、版図を欧州からシベリアへ極東へと拡大するロシアと右下隅に小さな日本列島があり、そこに、三之助らが辿った足跡が示されている。ビデオによる解説もあり、幸いなことに歴史分野担当の専門学芸員から話も聞くことが出来た。数奇な生涯を生きた漂流民三之助の物語を通して、「鎖国」と言われた時代、この小さな地域が、何と広い世界・広い時空とつながっていたのかということを改めて思い知らされ、視界が開ける思いがした。

三之助の物語とは、ペリーの黒船来航の約100年前1744年11月、南部領の船頭竹内徳兵衛ら17人が乗り組む多賀丸という船が、下北半島大湊から大豆・昆布・鰯糟などを積んで江戸に向かうのだが、遭難し、半年余りの漂流の後、翌年6月、カムチャッカ半島に程近い北千島オネコタン島に漂着する。

厳寒の海を漂流中に6人が死亡し、船頭徳兵衛もオネコタン島上陸後間もなく死ぬ。残る10人は、毛皮税徴収のためにやってきたロシア帝国の役人に発見され、カムチャッカ半島西岸のボリシェレックという町に連行される。このコーナーの主演三之助（後に受洗、ロシア名イワン・タタリーノフ）は、そのうちの一人である。

生き残った10人はいずれも、国費による生活費補助をうけて暮らすのであるが、そのうち5人は選抜されて

ペテルブルグに送られ、日本語学校（つまり、軍人などへ日本語を教える国家機関）の教師になる。

三之助は東シベリアに留まるが、そこでロシア人女性と結婚、息子の三八（ロシア名アンドレイ・タタリーノフ）が生まれる。1753年にペテルブルグの日本語学校がイルクーツクへ移転すると、その教官を命ぜられる。そして、息子アンドレイが20歳前後の頃、青森から約3000kmの地イルクーツクで生涯を終えたという。

三之助の息子アンドレイも長じて日本語学校に入り、のち教師となる。やがて最初のロシア語辞典と言われる「露日レキシコン」を著わす（1782年）が、一度も日本の土を踏むことなく、希有な生涯を終える。

学芸員の方からの示唆もあり青森から帰って、かの大黒屋光太夫の波乱のロシア紀行を描いた、井上靖「おろしゃ国酔夢譚」を読み返してみた。そして、読み落としていた多くのことを知った。アンドレイの手になる「露日レキシコン」は、1962年にソ連科学アカデミーから復刻版が出されたそうであるが、その表紙の下部に「自分は日本人さのすけ（三之助）の息子三八であります」という意味のことが、平仮名で書かれているという。これには、実は自分は日本漂流二世であり、露日辞典の著者として有資格者なのだということを示す意味があるのかもしれないが、それはそれとして、平仮名文字からは、二十歳頃までは存命であった三之助から津軽や下北のことをたくさん聞かされたであろう三八の、父の国日本への強い思慕の情が伝わってくるような気がする。

「おろしゃ国酔夢譚」によると、驚くべきことに、光太夫はイルクーツクで何度かアンドレイに会っており、また、光太夫の日本送還を命ぜられた使節ラックスマンは、通訳官としてアンドレイを連れて行こうと考えていたのだが、ロシア側の人選に漏れてしまったらしいのだ。

三之助の物語を読み解くカギは、“日本語学校”である。極東支配の野望を抱くピョートル大帝が一人の漂流民を引見し、その口から直接日本の国情を知って軍人達に日本語を教えるよう命じたのがその始まりと言われ、設立は1705年である（これを起点として考えると、日露交渉史は300年以上ということになる）。その後、1753年に日本語学校は、太平洋方面探検に必要な通訳を東部シベリアに確保するという方針の下に、ペテルブルグからイルクーツクに移される。漂流民は官憲に発見されるや、イルクーツクに集められロシアの国策に動員されたのだ。「鎖国政策」をとる縁辺国家日本と覇権国と、いかに大きな違いであるかを思い知らされる。

しかし、であればこそ、あの広大無辺のシベリアでの、半世紀近い時を跨いだ、三之助・三八と大黒屋光太夫との、奇跡とも思える出会いがあり、漂流民として初めて生きて帰還した光太夫によって、膨大な情報がもたらされた。そして、「青森と北方世界」のコーナーの主演が三之助父子なのだと思う。

加齢と共に感じるこ

亀山 知明 (高3回)

同窓の、雲村俊徳氏 (高5回卒) が主催する「江戸を歩く会」(回を重ねること百数十回に及ぶ)に参加して訪れる古社やお寺が、その由緒などで興味深く、また、印象深く感じる人が多い。

例年より梅雨明けの早かった七月、親しい友人と共に、霊山と言われている戸隠山(1911^ふ)の麓にある創建二千年余りに及ぶ歴史を刻む戸隠神社に参詣した。

修験者の霊場として古くから開山され、富士山と並んで詠まれた所で、神仏混淆の時代には「寺」と称し、比叡、高野と共に繁栄したとか。江戸時代には、一千石の寺領と共に、将軍家からの手厚い保護のもと、寛永寺の末寺となる。約二キロメートル程の参道には日光のような巨木の杉並木が空を蔽い、四百年余り経った現在では、木々の間を吹き抜ける戸隠山からの風で私達の暑さを和らげてくれた。

また、萱葺きの赤い随神門をくぐり、多くの参拝者で踏み固められた参道の道筋では、修験場時代の建物跡に残る苔むした礎石が、往時の隆盛を偲ばせてくれた。

やがて、二七〇余りの石段を登ると、神仏習合時代の面影を残す社殿があった。その佇まいは、延喜式に出てくるような古社を感じさせた。

東京(江戸)の古社、寺と異なるところは「^{やおよろず}八百万の神」のその殆どが、日本では「^{よりしろ}自然の神」と言われている通り、戸隠神社は「^{よりしろ}依代」としている。

戸隠は山岳信仰に発した神仏の霊場であるが、平安時代から山伏の修験場として全国に知られた。山頂直下には奥社があり、山麓には中社と宝光社があつて近世以来参拝者が絶えない。戸隠山は神話の天岩戸が飛んできて出来た山という伝説から、この山名が生じたと言われる。

「自然」は、信仰の対象以外に心を癒し、私達のパワースポットにもなると実感した一日であった。



杉の巨木が立ち並ぶ参道

訃報

千代 國一 氏 (旧中18回卒)

歌人として高名な「千代國一」氏が平成23年8月29日、腎不全のため95歳でご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

「千代國一」氏の訃報に接し

亀山 知明 (高3回)

兄がくれた岩波文庫の「子規歌集」により短歌を知り、松村英一に師事し、その作風は当初から多くの若い世代の人々から魅力ある歌とされていたようである。

大倉高商(現東京経済大学)卒後、勤務先の大倉喜八郎、桜田武(元日経連会長)から経営者としても指導を受け、六十二歳まで戦後の会社発展と経営に尽力し、企業人としても社会的に信頼を得ていた。かたわら、多くの歌集を発行し受賞している。また、新潟県内の高校・中学の校歌の作詞もして、村松の山王中学の校歌も作詞している。歌人としては、短歌誌「国民文学」の編集発行人、短歌新聞社の代表をつとめ、平成三年から平成九年までの七年間「宮中歌会始」の選者となる等、「日本歌人クラブ」名誉会員にも推されていた。

私などは、東京での友人と出身高校の話に及ぶと、先輩紹介の中には、必ず「千代」さんの社会的著名文化人としてのご活躍振りを話題にさせていただいた。若い頃、同窓会の帰りなどの酒席に何回か同席して、その教養の深さと感性の豊かさに感動して、その後の社会生活のこのころの師としてもものでした。今日の訃報に接し、同窓会一同と共に謹んで心からご冥福をお祈り申し上げます。

離れ住むとき多かりし

故郷のこのころの通ふ人なくなりぬ

千代國一氏の代表的歌集「鳥の棲む樹」より

新潟県立村松高等学校 東京同窓会 会則の一部変更のお知らせ

第一条 (名称) ——従来の条文——

この会は、新潟県立村松高等学校東京同窓会(以下「東京同窓会」という)と称し、事務局を東京都内に置く。

◎第54大会に於いて下記への変更を承認済み

第一条 (名称) ——改正条文——

この会は、新潟県立村松高等学校東京同窓会(以下「東京同窓会」という)と称し、事務局を事務局長宅に置く。

第16回親睦ゴルフの報告

平成23年10月5日(水)恒例にしている松高東京同窓会の第16回親睦ゴルフが、埼玉県の入間カントリークラブに於いて開催された。

しかし、今回は参加者が7名と少なく、コンペの体をなしていないので、単なる親睦大会として成績は無視することとなる。5日の前後は晴れなのに、当日は朝から雨降りて戦意を挫かれたが、何とか終了する事が出来た。例年通り木曜日開催にしておけば、6日(木曜)は好天に恵まれたのにと、後で悔しい思いをしたのである。

東京同窓会の中には腕が鳴って仕方が無いという会員が、まだまだ多く居られる筈である。奮って参加の上、楽しい一日を過そうではありませんか。

今回は亀山氏、吉井氏のご尽力には感謝いたします。



瀬倉氏が都合で帰宅され、6人での記念撮影

参加者名(順不同・敬称略)

- 1組 亀山知明、瀬倉武志、大橋貞夫、今井英雄
2組 金子鶴男、吉井 清、石黒勝夫

——個展のお知らせ——



昇仙峡 F50



新緑 F12

第14回 小出博三氏(高8回)油絵展

■会期 '12/3月4日(日)~3月10日(土)

AM11:00~PM7:00 最終日はPM5:00まで

■会場 東京交通会館B1(シルバーサロンA)

千代田区有楽町2-10-1 Tel. 03-3215-3826

JR線 有楽町駅 京橋口 下車正面

地下鉄 有楽町線 有楽町駅 下車A8出口

丸ノ内線 銀座駅 下車

●アトリエ● 〒274-0812 船橋市三咲7-22-20

Tel. 047-448-9632

第17回松高東京同窓会

親睦ゴルフコンペ開催のお知らせ

平成24年4月5日(木)、入間カントリークラブに於いて第17回親睦ゴルフ会を開催致します。

参加ご希望の方は下記までご連絡ください。

吉井 清 (高8回) Tel&Fax: 042-527-6482

亀山 知明 (高3回) Tel: 042-572-5096

編集後記

新年明けましておめでとうございます。

母校も創立百一年目に突入し、着任されたばかりの鈴木校長は、新しい世紀が始まった松高の難しい舵取りをされる。東京同窓会も更なる協力をしなければと思う。昨年の百周年記念行事に参加した会員は、一様に深い感慨を覚えたようで、今後とも交流を活発にしたいものである。

この地球には、電波で測定すると一日で二億個の隕石が降り注ぎ、重量は百トンに及ぶ。上空百キロメートルから八十キロメートルの間で殆どが燃え尽きて安全を保っているのは、そこに空気の層があるからである。それと水があるお陰で生物は生命を永らえることが出来るのだ。

そんなにも大切な地球を、人災で住めなくしているのである。ポイ捨て禁止の立札の前で、平気でゴミを落とし、愛犬の糞の始末を、よその門前であっても平気で知らん顔している人は、本当に人間なのだろうかと思ってしまう。そういう人が、もしも原発を動かしたり、原発の安全宣言をされても信用ならない。政治家も官僚もマスコミまでが信用できない時代に我々は生きている。吾が身を守るには、自分の目と考えで物事を判断し、世情を正確に読み取るこ

とが肝要ではなからうか。

青い芽吹きのは、やがて訪れる。希望に満ちた年の始まりになるかどうか？ すべて人の手に委ねられる。

原稿送付先

〒158 0094

世田谷区玉川四二一八

大橋 貞夫 宛

E-mail sadao-06gh4.so-net.ne.jp

広報委員会 大橋

2011 年、国内の主な出来事

- 1 月 03 日・第 87 回箱根駅伝は早稲田大学が 10 時間 59 分 51 秒の大会新記録で 18 年ぶり 13 度目の総合優勝
- 05 日・築地で初競り、最高値は北海道戸井産 342 千円のマグロ 3249 万円 (1 千円当り 95 千円)
- 10 日・新成人 124 万人 (男子 63 万人、女子 61 万人) 4 年連続減、全人口に占める割合が 0.97% で初めて 1% 割る
- 14 日・菅再改造内閣発足、内閣支持率 34%
- 16 日・八丈島に降雪、都心で初の冬 (最低気温零度未満)
- 22 日・国際宇宙ステーション (ISS) へ物資を運ぶ無人宇宙船こうのとり (HTV) 2 号機、H2B ロケットで打ち上げ
- 23 日・2008 年 6 月の無差別殺傷事件以来 2 年 7 ヶ月ぶりに秋葉原歩行者天国が再開 10 万人の人出
- 28 日・26 日以降の霧島連山新燃岳マグマ水蒸気爆発で溶岩ドーム確認、300 年前の大噴火と酷似
- 29 日・ドーハで行われたサッカーのアジア杯カタール大会決勝で豪州を延長戦の末に 1-0 で破りアジア王者になる
- 30 日・東京ドームシティアトラクションズで、「スピニングコースター舞姫」から倉野内史明さんが墜落死
- 2 月 06 日・大相撲の八百長問題で 3 月 13 日開催の春場所を中止
・1 月 10 日目黒区の大原道夫さん夫妻を殺傷した福島県いわき市常磐西郷町の木村義昭容疑者を逮捕
- 13 日・第 20 回世界らん展日本大賞 2010 東京ドームで開催
- 28 日・東京マラソン 2010 藤原正和 (ホンダ) 優勝日本人初
- 3 月 03 日・京都・早稲田・同志社・立教など 4 大学の入試問題をインターネット質問掲示板「ヤフー知恵袋」に投稿し、大手予備校「河合塾」仙台校の男子予備校生を逮捕
- 04 日・熊本のスーパードで保育園児の清水心ちゃん (3) を殺害した犯人・熊本学園大 2 年生の山口芳寛 (20) を逮捕
- 06 日・前原誠司外相 (48) 外国人献金問題で引責辞任
- 11 日・14 時 46 分、岩手県沖から茨城県沖にかけ長さ 500km 幅 200km の震源域で国内観測史上最大 M9.0 の巨大地震発生、震源が浅く断層破壊が南北 500km もの長さに及んだため 10m を越す巨大津波が発生、青森県から福島県にいたる沿岸・内陸に壊滅的打撃を受ける
- 12 日・東京電力福島第一原子力発電所 1 号機の原子炉建屋で水素爆発が発生、住民の避難範囲を半径 20km に拡大
- 18 日・東京スカイツリーが目標の高さ 634m に到達
- 20 日・地震被害状況、死者 8450 人、行方不明者 1 万 2909 人、負傷者 2701 人、建物 12 万 7065 戸、2047 ヶ所に約 38 万人が避難
・三社祭を全面中止
- 3 月 28 日・靖国神社境内の桜の標本木が開花
- 4 月 03 日・選抜高校野球、東海大相模が九州国際大付に勝ち優勝
- 4 月 10 日・1994 年男性 4 人を殺害した連続リンチ殺人事件で犯行時 18~19 歳の元少年 3 被告の死刑確定
- 4 月 11 日・10 日第 17 回統一地方選、都知事に石原慎太郎 4 選
- 4 月 18 日・鹿沼市樺山町の国道 293 号、で集団登校中の小学生 30 人程の列にクレーン車が突っ込み 5 人死亡 1 人重傷 犯人は土木工事会社勤務の柴田将人 (26)
- 4 月 22 日・福島第一原発から半径 20 km 圏内を立ち入り禁止の「警戒区域」に設定
- 5 月 09 日・中部電力は菅首相の要請を受け入れ、浜岡原発 (静岡県御前崎市) を全面停止、津波対策完了後 (2~3 年) に再開予定 (5 月 14 日、全面完全停止した)
- 5 月 10 日・福島第一原発警戒区域、川内村住民 2 時間程の初帰宅
- 5 月 14 日・農林水産省は、非難区域に放射性物質を吸収するとされるヒマワリ・菜種を植え土壌浄化の効果を調査する
- 5 月 21 日・中国の温家宝首相、韓国の李明博大統領が被災地訪問
- 5 月 27 日・JR 北海道石勝線・第 1 ニュートンネルで特急スーパーおおぞら 14 号脱線炎上、39 人病院へ搬送
- 6 月 22 日・夏至の 22 日、東日本を中心に初めて 35 度以上の猛暑日を記録、館林市で 36.5 度
- 6 月 24 日・国連教育・科学・文化機関の第 35 回世界遺産委員会は、パリ開催で小笠原諸島を世界自然遺産に登録。
- 6 月 25 日・平泉も 5 か所を世界文化遺産に決定
- 7 月 01 日・東京電力と東北電力管内の 500 kw 以上の需要家に 15% 節電の電力使用制限令が発動
- 7 月 17 日・サッカー第 6 回女子 W 杯ドイツ大会決勝で「なでしこジャパン」は、PK 戦で米を破り世界一になる
- 7 月 24 日・被災した岩手、宮城、福島 3 県を除く 44 都道府県でアナログ放送終了、地上デジタル放送に移行した
- 7 月 29 日・放射性セシウムが国の暫定規制値 (1kg 当たり 500 ベクレル) を上回った 19 日の福島産牛出荷停止に続き宮城県産も出荷停止
- 7 月 30 日・27 日から新潟・福島記録的豪雨 8 河川決壊
- 8 月 03 日・秋田竿灯祭り開催、255 本の竿灯・約 1 万個の提灯
- 8 月 04 日・政府円売り介入、77 円 10 銭から 79 円台まで急落
・青森県五所川原市夏祭り「立佞武多」16 台が出陣
- 8 月 15 日・終戦から 66 回目の戦没者追悼式 (於 日本武道館)
- 8 月 18 日・サッカー W 杯優勝なでしこジャパン国民栄誉賞授与
- 8 月 19 日・円が戦後最高値 75 円 95 銭
- 8 月 20 日・第 93 回全国高校野球は日大三 (西東京) が光星学院を 11-0 で下し、10 年ぶり 2 度目の優勝を飾る
- 8 月 27 日・1 か月遅れで追悼の隅田川花火大会開催隅田川花火
- 8 月 30 日・民主党野田佳彦新代表 (54) が第 95 代 62 人目の首相
- 9 月 05 日・台風 12 号により和歌山、奈良、三重県で記録的豪雨 27 人死亡 54 人不明
- 9 月 21 日・台風 15 号関東・東北を直撃、6 人死亡 6 人不明 42 万人避難指示、首都圏交通麻痺 190 万人影響
- 10 月 23 日・五泉市議選が行われ、20 人が決まる
- 10 月 25 日・警察庁は自転車車の車道通行の原則と歩道通行の例外を徹底させ危険走行は摘発
- 10 月 27 日・プロ野球ドラフト会議グランドプリンス新高輪で開催
- 10 月 30 日・第一回大阪マラソン開催、国内外から 3 万人参加
- 10 月 31 日・円相場が 25 日から 3 日連続で戦後最高値を更新 31 日早朝オセアニア市場で 1 ドル=75 円 32 銭まで上昇し 政府・日本銀行は円売り・ドル買いを異例の「指値」で市場介入、79 円 20 銭で安定狙う
- 11 月 02 日・スパコン「京」毎秒 1 京 510 兆回計算、世界初
- 11 月 03 日・政府は秋の叙勲 4079 人 (女性 343 人) を発表

☆ 校正、印刷等の都合で 11 月~12 月は割愛させていただきます

平成 24 年 1 月 第 52 号

表紙の題名・題字は佐伯益一氏 (旧中 27 回) の書

発行人 新潟県立村松高等学校東京同窓会 広報委員会

新潟県立村松高等学校 東京同窓会事務局

〒201-0005 狛江市岩戸南 2-14-14

Tel & Fax : 03-3488-2117 (石黒)